神戸学院法学第35巻第３号（2005年11月）

青年ミヘルス研究――1907年：トリノへ

氏　家　伸　一

１．SPD の／と愛国主義

1907年のドイツは，帝国議会選挙とともに明けた。というのも，前年12月，議会が解散されたからである。

それまで，ドイツの支配体制は，保守派とリベラル派の「結集政策」[(1)]を中軸にしてきた。これが，軍需予算への中央党――カトリックの自由派――の反対によってこわれた。1905年ロシア革命以来の民主化の波が中央党にも波及した結果であった。

ミヘルスの「1907年ドイツ選挙における保守派の勝利」（N. 198）[(2)]によると，ドイツは決して立憲国家ではないし，国権は「国王」と貴族の手にあり，ブルジョアジーは，まさにコントルノ（付け合せ）でしかない。政府と議会が対立する場合，政府の辞職交代ではなく，国会の解散がなされる。同じ君主制といっても，英国と独とは全く異なるのである。（ミヘルスは，しばしば言われる誤解だが，決してイギリスについて関心と知識を有していないわけではなかった。）政府の辞職などは，まさに「革命的な事件」となろう。解散後の選挙戦では，帝国主義と植民地主義への各党の姿勢が問われることになった。ミヘルスは，さらに，この選挙で真の争点は，カイザー体制か民主主義化か，であるとみていた。

青年ミヘルスの政治思想の中心テーマのひとつに，社会主義問題とならんで，専制と民主主義の問題があったことは，今までの論考からも分

かるであろう。さらに敷衍すれば，ドイツにおける民主主義は社会主義運動抜きには語れないし，社会主義の活性化は議会主義によって邪魔されているという基本的認識がミヘルス思想の持続的要因としてあった。

選挙戦の分析では先ず，保守派の策略が指摘されている。そこから読者に与えられた印象では，保守派も選挙戦に多大のエネルギーを注いだということである。彼ら，つまり体制派にとっても議会が政治的に重要であったことを示している。議会は無力であっても，ただの飾り物ではなかった。

前回1903年選挙では社会主義がアピールした農村地区は，今回，保守派によって奪還された。関税政策が工業労働者に有利とみなされ，農業労働者の反感を呼んだからである。

問題の中央党の担い手についてだが，ミヘルスによると，彼らも，SPD 同様，祖国無き者との非難が浴びせられたという。もっとも，中央党には，反 SPD のグループが存在した。また，カトリックという唯一の紐帯で結合した党は，地域と階級によって利害は多様で錯綜したことは容易に理解できる。SPD との共闘・選挙協力も実現しなかった。

選挙結果は，SPD の得票数増加にかかわらず，議席数は半減した。投票率の上昇，都市と農村の不公平な選挙区の割り振り，一票の重さの不公正（１：27），選挙権の制限（貧乏人排除），選挙干渉，など選挙制度とその運営方法での甚だしい後進性が何よも大きな原因であった。しかし，これらは，前回と同様の条件であった。

今回の結果を，ミヘルスは SPD の「相対的敗北」と名づける。前回と比べて，今回の敗北をもたらした最大の原因は，「祖国なき社会主義」キャンペーンに求められる。それが「大衆の下等な本能と低い知性」にアピールした。この反社会主義プロパガンダに対して SPD 側はなすすべを知らなかった。SPD 内に，ヨーロッパ人の間にも民族的相違が存在することを「アプリオリに否定する」者と，ブルジョアジーのと変わらない，ベーベルの素朴な愛国主義の如き「お粗末な極端」，「最もグロ

テスクな極論」の者という二種があり，その間を多くの党員が揺れ動いていた，という。

「祖国の理念においてSPDは武装解除された。」SPDは対抗できる理念をも提供できず，人類の地平に立つことも，史的唯物論に訴えることもできなかった。

フランス人ジョレスは，「本質的な動機の研究よりも，外面の結果を好む大衆は，あのSPD 80人の代議員が何の影響力も発揮できないのを見てうんざりし，幻滅したのだ」，と指弾した。

ミヘルスの分析からは，彼がどれだけ，愛国主義問題の究明にのめり込み，苦心していたかが分かる。社会主義は愛国主義によって「無力」にされるのか，この問題意識が一層強まっていく。(3)

先にも触れたように，今回の投票率は，75.8％から85.4％に上昇したが，それは，ミヘルスによると，無関心な保守派が，有名な「棄権者の党」を作り上げたようなものだ，と説明した。彼らがビューローの反社会主義キャンペーンに反応したのだ。

自由主義派は議席を増加させたが，（37から49へ），ミヘルスはさほど期待を寄せていない。所詮「帝国主義カイザーの補完物」でしかないから，と。

結局，選挙結果はウィルヘルムとその政府をより強固にすることになった。「暗いペシミズム」におそわれる。ドイツのみならず，全世界にとっても「由々しき危険」をもたらすであろう，と。

選挙後すぐ，「労働者新聞」（４月５日）に，「プロレタリアートの愛国主義」（N. 188）と題する記事を書いた。年初の「アホラシー選挙」では「祖国」という呪文がとどろき，関税政策などでのプロテスタント・ブルジョア政党間の違いなどが吹っ飛んでしまった。

唯一，「国旗の掲揚に悩んだのが，わが党だった。」（ただ，ミヘルスは，この年のうちに，「わが党」を離れる。）

ここで，ミヘルスは徹底した国際主義の立場に立ち，「プロレタリア

ートの愛国主義」，即ち，SPD における愛国主義を批判する。ベルンシュタインによる「我々こそ，唯一の最良の愛国主義」言明も非難の的とされる。SPD の愛国主義と支配階級の愛国主義との間には，いささかの違いも存在しない。

「ブルジョアジーと共通の祖国の存在，そして，ブルジョアジーと共通の＜敵＞――ちなみに，これまた，ブルジョアジーとプロレタリアートよりなる，――の存在可能性を理論的に認めるときに，いわゆる敵からいわゆる祖国を守る軍事行動を否定するようなことは不可能である。」

これらの激しい文章に，本紙の編集部は注記して，「あまりに一般化」していると批判した。「プロレタリアートの祖国愛の本質と権限を，ブルジョアジーの愛国主義と対立するものとして，又，プロレタリア国際主義の補完として，十分評価していない」と。あまりに，「暗すぎる」，と。しかしミヘルスによれば，プロレタリアートは祖国――支配階級の国家――に一切関わりをもたない。「彼の祖国は自身の階級である。言い換えれば，全人類である。彼はその一員であり，そのために生き，必要なら，そのために死ぬこともできるのだ。」

ブルジョアジーにとって，「祖国の利益は彼の階級の利益と一致する。」従って，ブルジョアジーの階級支配は，プロレタリアートにブルジョアジーの祖国思想を信じ込ませた時にのみ堅固なものとなる。「プロレタリアートに祖国思想を接木すること」に，ブルジョアジーの「全利益」が懸かっている。これは新しい視点である。

「プロレタリアートの愛国主義は，プロレタリアート自身を抑圧するために国家が利用する最強の権力手段である。」

祖国思想それ自体を拒否する姿勢は，ミヘルス自身がイタリア移住を決意したことと，心理的に関連しているかも知れない。

同じ頃発表された「愛国主義のルネッサンス」（N. 189 で）は，ミヘルスの理想とする愛国主義観念が定義される。それは，自由主義と民主主義，そして国際主義に矛盾しない愛国主義である。

「最良の自民族保護の方法とは，ひとえに，言論の自由と普遍的理性の進歩に存する」とのイタリア人思想家カルロ・カッターネオ（1807-1869）の言葉を紹介し，ドイツの学生青年に警告を発する。彼らは，排他的な「偏見」にみちた愛国主義が押し付けられており，よって，彼らに真の愛国主義のルネッサンスは望めない，と。彼らにとって，「故郷への愛と王朝への愛」は同じものである。それは，権力誇示，軍事的誇示，虚勢などの，一般的な愛国主義イメージでしかない。

この学生向け雑誌（Das Magazin für Litteatur）でミヘルスはこう告発する。インテリ青年の労働運動に対する「高圧的，軽蔑的な姿勢も」この愛国主義から生ずる。彼らは，かっての新興ブルジョアジーの理想主義を忘れてしまったのだ，と。

「外面的で浅慮の愛国主義感覚」に対して，「人間と人類の理想を真に自分のものとする愛国主義のルネッサンス」をミヘルスは希求する。

ミヘルスは，真の愛国主義を，「巨大な大衆の道徳的，知的，経済的向上のうちに，――同じく，当然ながら，少数の上層の道徳的，知的向上のうちに――さらに，倦まず進展する熱心な文化的活動」のうちにみる。愛国主義のルネッサンスは愛国主義の内面化を求め，祖国という抽象物への愛から，祖国の人間たちという具体的なものへの愛へと変容させる。そして，このルネッサンスは不断に拡大する。……。愛国主義と国際主義の間に本質的な違いはない。あるのは，程度の相違のみである。」

ミヘルスは，ドイツの青年学生をも見放し始めた。

2．社会主義とサンディカリズム

1907年４月３日，パリの地理学会ホールで，「社会主義とサンディカリズム」に関する国際学会が開かれ，翌年，その講演集が「社会主義運動」文庫として冊子化された。会議は社会主義を再生させる新しい傾向としてのサンディカリズムをめぐり，社会主義と労組の関係をテーマに展開された。フランスからは，本誌を主催するラガルデル（1875-1958），

ドイツからはミヘルス，イタリアからはラブリオーラ，そしてロシアからはボリス・クリチエゥスキーが参加した。(4)

ラガルデルは，統一社会党に所属しながらも，優れたサンディカリズムの理論家であった。彼の立場ははっきりしていた。

「もし階級闘争が社会主義のすべてとするなら，すべての社会主義はサンディカリズムに包含されているということができる。なぜなら，サンディカリズムを措いて階級闘争は存在しないからである。」議会主義は幻想であることが分かった，と批判する。

フランス・サンディカリズムは歴史的に必然だと主張する。つまり，ブルジョア急進主義の諸党が国家に同化し，その民主的政府が階級関係に一切手を着けないということが判明した時に，その革命的伝統にたち，民主主義と手を切り，自立した組織を有するプロレタリアートが立ち上がった，というわけである。他方でラガルデルは，SPD はドイツ帝国と同様，社会主義陣営内で反動的役割を果たしているとこきおろした。SPD は，帝国と同様に「ドグマで重苦しく，すべての自由に対し脅威であり，権威フェティシズムに囚われているのである。」SPD 批判ではミヘルスも同様であった。

ミヘルスは，先ずこの会議の目的を「インターナショナルな社会主義思想を若返らせ，資本主義の搾取に対するすべての国のプロレタリアートの反抗をより効果的にするはずの，新しい傾向」を発見することとし，続けて，「フランス・サンディカリズムのもたらした社会主義の新しい形式」を賞賛する。「社会主義の目的のいわば最新の表現」である，と。それは，「純粋にプロレタリア的の運動」という点で，「政治的社会主義の伝統的観念」とは区別される。それは，トレード・ユニオニズムともドイツの中立主義とも異なる。プロレタリアートの「代表」という観念を拒否するという点で異なる。ここにミヘルスは，「理念と階級の偉大な結合」という特徴を与える。

ミヘルスはこの「理念と階級の結合」を敷衍してこう説明する。サン

ディカリズムは，プロレタリア階級にのみ依拠するのだが，それは「階級的エゴイズムのダイナミックな力と，自己の数の重み，そして経済的必然性という最高の法」を有する階級である。「こうしてそれは，現代社会主義に課せられた問題を解決しうるのだ。しかし，それは又，大衆を階級的使命の自覚へと高めることを第一の義務と考える。結局，サンディカリズムは単にプロレタリア的であるだけではなく，革命的な社会主義でもある。」

ここで，サンディカ（労組）の運動が中心的位置を占めるような記述でないことが気づかれよう。階級概念が正統派的に強調されている。

この基準からみると，ドイツには，フランスのような社会主義のルネッサンスは望めない。むしろ，ドイツはアンシャン・レジーム下のフランスに似ている。ブルジョア的自由と民主主義が欠如している。この準「封建的体制」下の SPD には，従って「内的矛盾」が生来的につきまとっている。強大だが，ゼネスト戦術はとれない。「官僚的で階統制的で重苦しい組織」については，プロレタリア大衆の方は高く評価するが，社会主義の理念に反する，とミヘルスは考える。この内的矛盾からは，党のみならず，労組も免れてはいない。

「イニシアチーブが問題にならず，人はすばらしく規律づけられ，巨大大衆が機械的で厳格な巨大組織を形成し，すべてが軍事調で官僚的なところでは，労働者も他の階級と同じ道程，同じ形式をとってきた。それが，社会主義的官僚制と労組の官僚制に比肩しうるのは，公式の官僚制，完成し，複合的なものとしての国家官僚制以外にないことを説明するものだ。近代ドイツ国家は，それを作る全政党が倣う鋳型なのだ。」

「実際，我々の組織がどうして本来そうあるべき手段から目的それ自体になったのか，それが供する用益のためではなく，自己の理想化のために完成させる機械となったのか，は理解できる。その中央集権化した，鈍重な組織に触れることは，ドイツの社会主義者と労働者にとっては犯罪行為なのだ。」この土俵では「国家の組織」の方がはるかに強力だ。

従ってドイツに，「サンディカリズム，直接行動，ゼネスト」の余地は殆ど無い。

「組織のための組織愛」と議会主義戦術のもとで大衆は骨抜きにされている。結局ミヘルスは，SPD には「ドイツの環境を民主化すること」はできないと断ずる。「我々の第一の課題は，議会主義と理論的誤謬を正すこと」，そして，「革命的階級闘争」を勝利へと導く唯一のものである「革命的理想主義」を，繰り返し示してやることである。そしてミヘルスはこう締めくくる。

「以上が，我々ドイツのサンディカリストの義務であり，我々は，フランスの同士諸君，諸君の勇気ある行動に導かれてこう力強く宣言する。他のどの国とも同様に，ドイツにおいても社会主義はサンディカリズムによって再生できるだろう。」

先ず，ここでのサンディカリズムが，先の「革命的理想主義」とほぼ同義で使われていることが分かる。

ところで，イタリアでは，ラブリオーラ・グループが1907年には，はっきり党を離れることになるが，４月のこの会議でのラブリオーラの演説からは，党が反プロレタリア的になりうるという彼の総括が伺える。

「党は専ら政治的機関であるが必然的に妥協と取引に従事せざるを得ない。我々は，社会主義が階級の精神を，階級の組織に限定してという条件下でのみ保持できるのだということが分からなかった。党は，階級闘争に付属し従属した，限定された仕事には有益だが，プロレタリアートの革命的熱望を体言することなどできない機関でしか，もはやない。党の利益は階級のそれとは一致しないのだか，我々は，どのようにして，党が，ある場合に階級それ自身の発展の妨げになるかを，理解した。」

この見地の前提には，サンディカリズムが社会主義から演繹した二つの命題がある。第一が，党は階級とは異なる，第二に，社会主義は議会主義と民主主義とは別の方法で実現される，というものである。

これと対比すると，ミヘルスの思想的立場は，抽象性をまぬがれない

が，あくまで党のイデオロギー的機能に固執する点では一貫しているといえる。

「ディールへの反論」（N. 190）でも，ドイツへのサンディカリズムの導入は，「ドイツ労働運動の内部状況の全体を強力に移しかえることになろう」と述べている。このアルヒーフの小論文でミヘルスは，サンディカリズムをドイツの労働運動との関連で非常に手際よく定義している。

フランスの労働運動は，ドイツのラディカル派と改良派の双方から攻撃される方向を志向している。一方では，労働運動の重心を党から労組へ移そうとするが，他方では逆に，党における社会主義革命の最終目標理念の宣伝を労組運動の主要目標とする。レギエン，ベルンシュタイン，カッツェンシュタインにとってサンディカリズムはあまりに「政治的」であり，カウツキー，ルクセンブルクにとっては余りに「労組」より，ということになる。ミヘルスは第三の道，党と労組の協力による革命的社会主義運動の復活を志向する。

以上からも分かることだが，ミヘルスのここでのフランス・サンディカリズム観はあくまでミヘルス自身の社会主義観に引き寄せた見方であった。「革命的理想主義」は，ミヘルスの社会主義思想においては，党が担うべきとされた機能であった。

ところで，この会議にミヘルスが参加したこと，そしてそこで発言したことは，彼の「政治的伝記での困難な結び目」をなす。というのも，これは，1932年の自伝的文書（「底流」論文）と共に，「ミヘルス＝ソレル流の革命的サンディカリスト」説を広めるのに大きな役割を果たしたからである。（我々は，この仮説が正しくないことをこれまで説いてきたつもりである。）

翌，08年に発表された冊子は広く出回り，一定のミヘルス像定着に寄与した。(5)

しかしフェッラーリスもいうように，ミヘルスの講演には，新しいものは無く，むしろ SPD と祖国ドイツへの告別文の印象を与える。（「ド

イツに生まれたという事実は，もはや，頭を高くして歩く権利を認められない」ということを意味する)。又，フランス・サンディカリズムの賛辞は，ドイツ，イタリアでは「国の民主化が絶対必要の行程であり，革命的サンディカリズムと党活動の結合が必要」と主張することを妨げなかった。

この「我々ドイツのサンディカリスト」発言は，前年以来のバルト，ラガルデルとの論争で，ドイツの労組は再生不可能と断言していたこととどう整合するのか，読者は困惑するであろう。先ず，確認しておきたいのだが，この時期のミヘルスは，個人史的にも思想的にも，一大転機を迎えていたと思われる。

ミヘルスは前年の秋―冬にイタリアに滞在したが，その時，トリノ大学への就職活動を行い，12月には正式に申請した。ロリアの全面的支援とエイナウディのいわば＜許可証＞を得ていた。(ウェーバーも尽力した。)そして翌07年７月に教授資格 libera docenza を得た。(6) ともかく，07年初頭よりトリノに移住し，４月の先の大会ごろには SPD を脱会したと考えられる。

フェッラーリスは，先の「サンディカリスト」発言を，このような多忙と激動の時期における「一時的ではかないエピソード」であったと表現している。(7)

我々は，この国際会議での自己の言動について，25年後の「底流」論文で一切記載されていない事実から，青年ミヘルスは，先の発言をさほど自覚をもって行ったわけではない，と推測する。さらに，ここでの「サンディカリズム」が文字通りの意味よりもより広義で使われていたことは，先に触れた。階級闘争を中心とした革命的な「社会主義運動」の理想をそこに込めていたとおもわれる。

この年９月頃に書かれたと思われる「イタリア社会主義運動におけるプロレタリアートとブルジョアジー」の最終章でミヘルスは，革命的サンディカリズムの意義について「明晰で手厳しい決算書」(8)(フェッラー

リス）を書いている。

そこでは，フランスとドイツ・イタリアの革命的サンディカリズムの状況を巡る違い，党・労組関係の違い，そしてインテリ観の違いなど，フランス・サンディカリズムがフランス労働運動史の産物であること，同様にイタリア・サンディカリズムも「環境の必然」の産物であることが，簡潔に語られている。

つまり，サンディカリズムと社会主義の環境は三国で異なり，イタリアとドイツでは，サンディカリズムは党無しには生存できないと考えられていたのである。ちなみに，ラガルデルも決して党の役割をアプリオリに否定はしていなかった。(9)

3．第二インター・シュトゥットゥガルト大会

第二インター，シュトゥットゥガルト大会（8月16日）を前に，ミヘルスは「社会主義運動」誌に論文「来るべき社会主義インター」（N. 202）を書いている。

先ず，入会条件についてアナーキストを排除した「不愉快」な処置にミヘルスは愚かなことと批判している。というのも，ミヘルスは嘆くのだが，「率直に言ってアナーキストは社会主義者だからである。」二義的な戦術問題でしか違わないのに，と。「土地と労働手段の社会化」を「階級闘争」によって追及することではまったく社会主義的である，と。

イタリア人アナーキストのルイージ・ファッブリの，社会主義と統合できる二つの条件の提案に触れて，ミヘルスは興味深い判断を示している。

二つの条件とは，

1） 社会主義が改良主義を，アナーキズムが個人主義を放棄すること，

2） 議会主義戦術を，個人的意見にまかせること，である。

ミヘルスは，まず改良主義と革命主義とは単純には区別できない，という。言葉だけの，臆病このうえない革命主義というものがあるからで

ある。（SPD の革命的言辞主義）さらに議会主義についても，それは「パンドラの箱でも万能薬」でもない，と。「これらは，頭を悩ませるに値するだろうか」と反問している。

ともかく，イギリスのトレード・ユニオン主義者を認めておいて，アナーキストを排除するのはナンセンスであると断ずる。

（ちなみに，ミヘルス自身も結局大会出席を拒まれた。イタリア代表団の一員として参加しても，彼の SPD 批判が激しいという理由で，イタリア代表団によって出席を控えさせられた。SPD の国際的ヘゲモニーの表れとミヘルスは評している。[10]）

では，当時のミヘルスにとって何が中心問題となりつつあったのか。インターを構成する各党の組織と，反軍国主義問題であった。

ともあれ，ミヘルスは「社会主義インターの議決の幻想性」を予言するのだが，半ば的中する。

当然ながら，戦争と軍国主義については詳しく論ぜられている。他民族による抑圧と自民族内の階級抑圧はともに人民の不幸だが，前者のほうが人民にはより強く感ぜられる，という。祖国の統一と独立はプロレタリアートにとってさえ望ましい。反帝国主義の脈絡では当然の主張と考えられる。すぐ続けて一見矛盾することが語られ，困惑する。すなわち「祖国」というものは存在しない，と。人種等の基準の不適格なことは従前から主張されていた。「祖国の観念の理論的基準を見出すことは無益である。」今日，実際生活では国家と同義である。社会主義にとって，この，祖国＝国家という「抽象」――この背後には，「憎むべき」資本家の団体が控えている――に対する「日常的戦い」が必要だ。

前年，ドイツに反戦で共闘を呼びかけ，すげなく拒絶されたフランスのエルヴェによる，反軍国主義プロパガンダについても，ここでのミヘルスは疑問を呈している。即ち，戦争を攻撃的と防衛的に区別するのは「子供の無駄話」に等しい，と。社会主義者は，自国の「攻撃性」を否認する「反軍国主義的ユートピア」に陥っている，と弾劾する。ミヘル

スにとって，政府と資本家の側に立つか，「民族を超えた（ア・ナショナル）地盤」に立って反抗するかのどちらかしかない，第三の道は無い。党内で反軍国主義者リープクネヒトを否定したベーベルは，結局政府と協力して「反軍国主義者を打倒」しつつある。よって，ミヘルスは来るべきシュトゥットゥガルト大会で，SPD を第二イターから追放せよ，とさえ要求する。そうしないことは，「愚かで」馬鹿げたことだ，と。だが，それはどの党にも期待はできまい。せいぜい，フランス（ヴァイヤン），イギリス（ハインドマン），ベルギー，イタリアの党が，反 SPD と SPD 再生の力を貸してくれることを，一縷の望みとするだけである。

同じシュトゥットゥガルト大会前に書かれた「SPD と世界戦争」（N. 193）も SPD への幻滅とさらには軽侮の調子すら感じさせる。（因みに，このモルゲン誌では，ゾンバルトがミヘルス紹介の文章を書いており，そこでは，ミヘルスが「反軍国主義の中心的担い手である革命的サンディカリズム」に属しているとされている。）

ともあれ，ミヘルスは，４月の帝国議会における，ノスケの愛国主義的演説と，それを支持するベーベルの演説を弾劾する。SPD は世界の社会主義者の中でも「最悪のもの」という伝説を支持し，それに他国の友党よりもはるかに愛国主義的になった，と付け加える。

ここで彼は戦争に対する姿勢では「現代世界の国民生活で覇を競っている」二つの「世界観」があるという。ひとつは，「全体主義と国家主義の世界観」であり，そこでは権力分割もなく，国民は「臣民」の地位にある。（ドイツの現状そのままである。）第二は，社会主義の世界観である。そこでの対立軸は民族ではなく階級である。

この世界観状況は，まさにドイツを反映しており，自由主義的世界観は見当たらない。このことは銘記しておくべきだろう。ミヘルス思想の中で自由民主主義の世界観はどのように位置づけられているか，の問題が常に問われうるからである。

ミヘルス自身は，シュトゥットゥガルト大会に，自らは出席できなか

ったためか，大会でのローザとレーニンによる，ベーベル決議案の修正をめぐる動きや，エルヴェの痛烈な SPD 批判については直接は知らなかった，と思われる。[11] SPD をインターから追い出せという意見は，ミヘルスの陥った「政治的，思想的，実存的な深い危機」[12]を暗示している。確かに，先の社会主義と愛国主義問題関係の論文と比べても，精緻さに欠け，それまでの彼の思索の広さを失っている。このような自己の思想的混迷を率直に告白したのが，９月にロリアに宛てた手紙である。それは「苦渋に満ちた経験の終着点」（フェッラーリス）を示している。

「シュトゥットゥガルトは社会主義者には悲しい様相を呈している。もともとの運動は（数の計算にはお構い無しに），全くの破滅の淵にある。現在の社会主義は魂無き肉体の如きもの。自分の心も，脳細胞も全く信頼していない，大げさな語句を語る人間のようなもの。20代の理想主義者と科学者は，多かれ少なかれ有能なデマゴーグ，多かれ少なかれ選良の政治家に席を譲った。そして，労働者は幼児の永遠の無邪気さを持ちながら，彼らの影響力を発揮するすべを知らない。Mundus vult decip（世界・人類は欺かれることを欲す）こそ，社会主義の新しい段階の標識である。」フェッラーリスは「墓碑銘」の感があると評している。[13]

４．SPD エッセン大会

９月20日にエッセンで開かれる SPD 大会でも，ノスケ問題が議題にのぼるのも当然であった。

ミヘルスはトリノの社会主義系の新聞 Grido del Popolo（９月24日）に「ドイツの社会主義と労働者の国際主義――エッセン大会によせて」（N. 196）で報告している。全体の調子は悲観的である。

社会主義の先史時代は終わった，素朴な国際主義の時代は終わった，と。第二インターの反軍国主義の問題について党がリープクネヒトを否定したことからも分かるとおり，SPD は，「帝国主義戦争を防止し，阻

止できるのは各国の社会主義政党が共同してあらゆる革命的な反帝国主義の闘争形態を採用すべきであるという主張をおさえようとする態度を示したのであった。[14]」

エッセン大会でもそれを再確認しただけであった。「率直に言って悲惨な応答」とミヘルスは形容している。

ミヘルスはこの「ドイツの愛国主義的な社会主義という新しい社会現象」の原因を究明しようとする。

直接的には，先の選挙の敗北の総括として，「軍国主義的植民地主義」への対応のまずさを指摘する。しかし，当の SPD は，前例の無い敗北からの立ち直りを，「大胆で確かな方向転換」にではなく，逆に「社会主義の過剰」批判に求めたのである。SPD は，大衆に迎合し，「心底からの愛国主義者」になった。「ヨーロッパの進歩と平和の責任」が SPD の肩にかかっているのに，逆に「欧州でもっとも強烈で危険な軍国主義」を後押しすることになる。

エッセン大会についてミヘルスは，翌08年，Le Mouvement Socialiste 誌へも「SPD の愛国主義とエッセン大会[15]」を書いている。

ミヘルスは，素朴な社会主義的国際主義の時代は終った，そして，「伝統的社会主義の危機」の時代が始まった，こういう基本的認識のもとで，独立した思想家として歩みを始めると，まず宣言した。「偽善の仮面」を剥ぎ取り，「真実を語る」ことを，本稿での使命とみなしている。

いうまでもなく，エッセン大会では 4 月議会とインター大会での，幹部の愛国主義的演説と反軍国主義反対の弁明を求める動議が出された。それに対し，「ブルジョア・ドイツへの攻撃戦（これは一体何か，とミヘルスは問う）の際には，帝国のカイザー領土をまもるために，武器をとらねばならない」と，「ドイツ社会主義のローマ皇帝」は断言した。ミヘルスはアイスナーの意見が「最も明晰」と紹介している[16]。つまり，ドイツ・ブルジョアジーが外国人に，ドイツのプロレタリアートが自分

たちの側に立っていることを語ったとしたら，それは戦争の危険性をいや増すだろう。（もし戦争になったら，という，仮定の話が逆に戦争の危険性を増すという逆説。）

ミヘルスは党の官僚制について触れ，そのブルジョア化は止めようがなく，そのため，「党の過去は重苦しいものとなった」と，後悔をこめて述べている。

ベーベルが「党の栄光ある伝統」とよぶところの，SPD 愛国主義の伝統はその議会主義戦術と関係している。というのも，選挙と議会でくりかえし「祖国なき者」と攻撃されてきたからである。従って，リーダーの愛国主義発言は，「社会主義者を自称する日和見主義者のマネキンども」には心地よいものであった。彼らは敗北の原因を「あまりに多い社会主義」に求めた。ミヘルスによれば，「あまりに少ない社会主義」にこそ真の原因があった。ベーベルは，「我々の戦争によって祖国を守るのは，ブルジョアの利益のためではない，それに抗してである」と強弁した。ブルジョアの愛国主義に対して，「プロレタリアートの愛国主義」を対置したつもりだが，それは「詭弁」以外のなにものでもないのだ，と。

ともあれ SPD とドイツはヨーロッパの「自由と平和の発展」そして，「文化と文明」に対して「有害」であることは明らかである。しかし，SPD は依然として，国際社会主義でヘゲモニーを有している。

ミヘルスによる SPD 批判の焦点は，シュトゥットゥガルト大会を機に，議会主義戦術から愛国主義体質へと移る。それは，「他国の社会主義政党を危機的状況に追い込み，ヨーロッパ社会主義の発展を麻痺させている。」それどころか，友党の愛国主義を触発することになる。

前年まで，フランス人社会主義者に SPD 愛国主義を過大評価しないように説得し，少なくとも社会主義者間の軋轢を緩和すべく努力してきたミヘルスだったが，今や，イタリア移住をきめた欧州人として共に危惧する姿勢を表面に出すようになる。SPD 愛国主義を蜃気楼，幻影と

してではなく実像として科学的，歴史的に分析しようとする。

ミヘルスはこの SPD 愛国主義に対抗できる可能性に触れている。ウィルヘルム二世下のドイツと SPD の愛国主義に対抗できるのは，欧州規模での自由で「民主的な愛国主義の覚醒」である，という。それは「文化と文明」を担保する。

しかし，具体性にかける。結局，マルクスへの原点復帰しかない。国家とは支配階級の執行機関でしかないという永遠の定理の再強調である。ミヘルスは SPD に絶望しても，「労働者の社会主義」理念とマルクスの「規範の不易の真理性」への確信は未だ揺らいではいないように見える。

シヴィーニも言うとおり「党の拒絶はマルクス主義の拒否と歩みを同じくしていないように思える。」そして，フェッラーリスの問うように「ミヘルスの擁護するのはどのマルクス主義なのか。」(17)

ここでひとつだけ付け加えれば，ミヘルスは，マルクスの経済学には「過誤」がある，と主張している。

シュトゥットゥガルトとエッセンで明らかになった実態を冷静に分析する作業は，この頃から始まった。ミヘルスの新しい課題である。

SPD への最終総括とでも言える学問的で「批判的」な研究がアルヒーフに発表された。多くの議論を呼び，ベーベル，ヴィクトール・アドラーらの不興を買ったという。(18)

「国際的結社における SPD ――批判的研究」（N. 200）がそれで，SPD の国際的社会主義におけるヘゲモニーの成立と凋落を歴史的に跡付けている。(19)

SPD の愛国主義と国際的社会主義運動でのヘゲモニー追求は，第二インターの初めより見られたとミヘルスはいう。とりわけ，1890年の社会主義法撤廃後 SPD の威信が高まった。ラッセル，ラブリオーラ，フェッレーロ，トゥラーティらの賛辞が紹介されている。

その原因理由をミヘルスは，こうまとめあげている。(a)マルクス主義の優勢，(b)戦術的成功：半絶対主義下での合法主義，(c)選挙での勝利：

他党も革命主義と理想主義を放棄し，選挙中心主義へと移行，(d)他党への「傲慢で反民主的な態度」，である。

しかし，そのヘゲモニーも頽廃し消滅していく。その契機もいくつかあった。

(a)ゼネスト：人民の権利の擁護と反革命的措置の阻止のため，1902（ベルギー）――1904（イタリア）の間にヨーロッパ中にゼネストが頻発した。といって，それは社会主義革命とか，権力獲得を目的とはしていなかった。しかし，ドイツでのみ行われなかった。アウアーはGeneralstreik=Genralunsinn とうそぶく。SPD 幹部は，修正主義に対してよりも，「ゼネストという危険な手段」に対して猛然と敵対した。ラディカル派も，「イタリア式遊戯」，「一時的興奮」と反対した。彼らは理性と道義に自惚れていた，とミヘルスはいう。

(b)反軍国主義と戦争防止の手段としてのゼネストは，第一インターでは認められていた。既述の通り，SPD は一貫して反軍国主義に反対していた。ベーベルがその急先鋒であった。

(c)モロッコ事件に際して，フランス社会主義者が望んだ運動――平和か，それとも戦争と革命か――に対し，SPD は「嘲笑と侮蔑」しか示さなかった。ジョレスによる，「プロレタリアートにとって，戦争の不易の法というようなものは存在しない」との命題に対し，ドイツは「資本主義世界では戦争は不可避」との命題を対置した。

ラディカルのカウツキーと修正派のハイネは，反ゼネストの基調では全く同じだった。理由は，①展望のない，政府との戦い，②犠牲，③組織の崩壊の危険性，といつものようであった。この SPD の無為無策により，「ドイツの労働運動に対する憤激が広範に広がった。」

SPD は，祖国と戦争問題で，国際主義への反動を招く。モロッコ戦争の危機にさいして，300万票政党の「ドイツ的受動性」，「戦争の危険性に対する歴然たる無為，無関心」は，外国での愛国主義の覚醒に手を貸した。ベーベルは，自己の反軍国主義に対する自己の反対を，党と祖

国への「責任」で正当化する。イタリアのある社会主義者はそれに触れて，「自己の個人的卑怯さのアリバイ」捜し，と SPD を非難した。

「SPD の相変わらずの幼児性と根深い軍国主義的精神」が，ウィルヘルム二世のドイツ支配を無制限にし，欧州の恒常的脅威にしている。それへの反作用として，イタリアでは，クローチェら多くのインテリが，反軍国主義に反対し，ラブリオーラ，チコッティ，レオーネ，オラーノらの反軍国主義者は孤立している。

結局，戦争問題での SPD の態度は，いたるところで愛国主義を目覚めさせ，外国の友党を――それらにとって SPD は，祖国を持たない真の労働者党の模範となりえたのだが，――対ブルジョア階級で，非常に困難な状況へと追い込んだ。

総括としてミヘルスは，SPD は「誇大妄想狂」に陥っている，という。ミヘルスは，SPD は「国際主義の義務」を果たしていない，そのことにすべての元凶があると断言する。「文明の敵」ドイツの好戦的，権力主義的な傾向に抵抗するというその任務を放棄した SPD は「至る所に，幻滅を与えている。」

しかし，ここでミヘルスは SPD の「背信」というような「倫理的価値判断」よりも，「事実の発展による確信」として，「SPD の国際主義の希薄化は明らかだ」と主張する。

ラディスラス・グンプロヴィチとの思想的交流の可能性は近年の研究でも注目され始めたが，ここでミヘルスは SPD の脱国際主義化現象の説明にグンプロヴィチを引用する。それによると，要するに，社会主義運動が工場監督，労働争議委員会，消費組合，自治体のガス灯などという日常的で具体的な問題に精を出していけばいくほど，それだけ，国際主義感覚を減退させていくというのである。それは，学問分野で専門化がすすめばそれだけ，総合的な学者がいなくなるのと同様で，労働分割の原理の結果である，と。

そして，この分業の進行という点で SPD は他に抜きん出ている。最

も実際的な政党でもある。言い換えると，「亡命者社会主義者」の党から，体制内化した党，後の言葉を使うと，「国家内国家」へと変貌した党ということになろう。

05年のロシア革命後，かっての「コサック化」の脅威に替わって，「プロイセン化」の脅威が生ずる。しかし，SPD は過去の選挙での勝利に酔って，この認識は拒否して来た。これが他国での SPD 評価に「深い暗影」を投げかけている。

更に，今日，他の諸国での議会主義の成功は SPD の顔色無かからしめ，フランスのサンディカリズム運動は模範としての SPD 像を解消してしまった。

そして，このインター内での地位低下を招いた「政治的無能力」の原因について，ミヘルスは，ユンカーと官僚制が牛耳るドイツ国制，「現実的なブルジョア・リベラリスム」の欠如（この二点については，SPD は何かできたはず，とミヘルスは考えていた）に加え，最も致命的な疾病としては，党組織そのものをあげている。

「その弱化の最深の根拠は，巨大な官僚装置をもった，専ら刊行物読者と選挙人の党という SPD それ自身の政党政治的本質にある。国家の中央集権化された権力を克服するために，彼ら自身中央集権化し，この権力に打ち克つために，唯一の手段，即ち，ドイツ国制では唯一民主的な要素である，選挙権をフルに利用した。「その全装置は選挙戦の勝利に合わせてしつらえられ，それに向いている。彼らの邪魔をするもの，その有機的構造，もしくは少なくともその外的形式，つまりその組織を脅かすようなもののすべてはそれと対立する。」

「栄光ある戦術」，「鉛のごとき，他律的規律」以上のことには無力であること。何よりも，犠牲を恐れる「臆病さ」。「それは人間を強化はしない。むしろ，その複雑な機構に合うように部分機構を鋳造すること，そして次のような規律ある党員を作ることに汲々としている。つまり，その最高の特性が，ドイツの国民性，服従という組織されやすい家畜的

性格，業務部内での過剰の服従にあるような党員，である。」

SPD のこの「活気と理想主義の欠如」について，ミヘルスはイタリア人ダリオ・パーパの，この上ない皮肉なことばを紹介している。「革命的なドイツはいつか来るだろう。疑いなく。しかし，私はそれを想像できない。多分，ドイツの社会主義者はある輝かしい日に，皇帝のところへ出向いて，言うだろう。陛下，我々は革命をなすためにすべての準備を完了しました。ただ，将校と陛下の威厳が欠けているだけです。」

国家はその体制に見合った政党しか有しない。これが結論である。

「我々の考えでは，かかる犠牲は，社会主義政党を，ドイツのように顕著に独裁的オリガーキッシュな国家体制と精神構造の国の社会主義政党を，支配者にするどころが，状況がどんなであれその奴隷にするに違いないし，現代の決定的な歴史的ファクターの仲間から排除するに違いない。従って，ドイツ帝国の権力関係が今日のままである限り，SPD も又，近い将来，権威―― SPD が，……驚くに値する組織能力，幹部の団結，そのプロレタリア分子の多くが有する道徳的，知的水準の高さ，その国際的社会主義におけるヘゲモニーのおかげで今日有している権威――を失うことになろう。」

5．民主的貴族制論

「製鉄業や自動車産業を襲った1907年の恐慌[20]」は，労働者，なかんずく革命的サンディカリズム系の労働者の運動を激化させた。10月，ミラノとトリノの労働評議会がストに入り，「労働総同盟」にゼネストを呼びかけた。しかし，拒否され，評議会のスト参加者も少なく，資本側と改良派の反動により，この闘争はあえなく敗北した。これを機に，Il Grido del Popolo 紙上で，ジュリオ・カザリーニとミヘルスの間で論争が展開された。そこでは当時のミヘルスの政治思想のエッセンスが凝縮されているので，最後のそれを見ておこう。

「社会主義的民主主義と民主的貴族主義」（N. 195）という印象的なタ

イトルを持ったこの記事での，カザリーニとの争点は，「労働者大衆に対する指導部の姿勢」，つまり，「党内デモクラシの実践的で積極的な意義という問題」であった。ミヘルスによると，指導層は労働者大衆の代理人 esponenti でしかない。しかし，カザリーニは，「我々は，何も持たず，何も知らない人々によって命令されることはできない」という。それに対してミヘルスは，「問題の根本にまで行こう。労働者におきる事柄を，労働者自身よりもよく知っている，党と労組の＜我々＞とは一体何者か」と問う。それは，＜一握りの脱ブルジョア＞と，元労働者の職員のことだ。換言すれば「労働者の世界を一部は，「学問と外部から」しか知らない同志たちであり，他方は，なるほどプロレタリアートのことは，自身の経験から知ってはいるが，今やむしろプチ・ブルの環境に身を置いている。」この，「プロレタリア運動の最良の判事」である＜我々＞とは，従って，脱ブルジョアと脱プロレタリア，要するに脱出組である。これは事実の問題であり，「道徳的批判（これは不条理であろう）」ではない，とミヘルスは断っている。（ミヘルス自身が脱ブルジョアであったことは，あらためて思い起こす必要は無かろう。）

「民主主義の形式で覆われた貴族制」，これが，党幹部支配に新しくつけられた名前である。いうまでもなく，党内オリガーキーの最初の政治学的定式化である。これに対して，ミヘルスは確言する。「我々は，組織された労働者大衆に忠実な代理人でしかない。」

この記事の２日前（11月３日）にミヘルスは，「社会主義者にとって，人民主権はただの夢であるだけではなく，我々の行動の基盤である」と書いた。カザリーニは，「人民主権が存在するのは，社会主義が存在する場合であり，大衆がいまだ準備不足で，教育不足の今ではない」と答えた。(21)

代表と代理という民主主義の古典的テーマに続いて，組織された労働者大衆と未組織の労働者大衆という社会主義特有の問題について論ぜられる。ミヘルスが組織された大衆の重要性を強調するのは言うまでもな

い。しかし，「組織されていないプロレタリア大衆の重要性」について，ミヘルスは自信をもって否定できない，とのべている。ただ，歴史の実証したこととして，組織されていない労働者の中に，しばしば，「見事な抵抗精神と犠牲的精神が生きていること」が指摘されている。逆にそれは，「組織の鉄の環に閉じ込められた労働者（イギリスのトレード・ユニオンに組織された者で，彼らは貴族的でエゴイストである）」では見られない。組織された労働者の場合でも，「階級意識と連帯ではなく，相互扶助のケチなエゴイズムの精神に侵されている場合が多い」，と。

しかし，究極のところ，ミヘルスにとって，政治闘争の「基準」をなすのは，党員証であり組合員証である。従って，カザリーニが「アモルフで無知な大衆」の意向に反対することは「我々の権利であり義務である場合も大いにありうる」とする意見にミヘルスは同意する。

ミヘルスによれば，最近のトリノでのゼネスト失敗の原因は，「最終局面で，組織された大衆にしかるべき席を与えなかったことにある。」彼らは無視され，「ゼネストを宣する未組織の大衆の専制と，恣意的に終戦を宣したボスの専制」との間を右往左往しただけであった。

カザリーニは，二者択一を迫る。未熟な大衆に追従するか，彼らを教育するか，と。ミヘルス，これは「宿命的なディレンマ」ではない，と主張する。つまり，大衆の声を聞きつつ，教育することが必要，と。

「我々は組織された大衆によって選ばれた代理人」だが，労働者の教育は我々の「歴史的使命」であると付け加える。

この教育関係も相互的であり，「教育者が今度は教育される。」つまり，リーダーと大衆は互い改良し補完しあう親友のようなもの，と結論づけている。

「民主主義とは結局のところ，人民の選んだ者による人民に対する支配ではなく，大衆の，自分の選んだ者に対する支配である。」このシステムは有害な面も含んでいる。しかし，「今のところ，これは，可能なシステムのどれよりもましなシステムである。」

そして，最後に，こういう警句で締めくくっている。

Caveaat proletarii ne quid aristocratiae capiat socialimus!

（労働者を注意せよ，貴族制にも社会主義にも引っ張られるな）

ミヘルスの中で，社会主義＝民主主義の等式で，後者に問題意識の比重が移っていったのかも知れない。また，未組織大衆への問題意識を彼が持っていたことは記憶しておこう。逆に「組織された大衆」の組織自体が反民主的なオリガーキーの母体であった。未組織大衆のダイナミズムこそイタリア・アナーキズムが拠って立つ土台であった。しかし，ミヘルスにあっては，党組織の保守性を根源から突き崩すファクターとして，アナーキズムと未組織労働者は評価されなかったようである。

６．社会主義から社会学へ

SPD とドイツに対するトータルな幻滅は，反動として，イタリアとその社会主義への評価を高めたかというと，そう単純ではない。アルヒーフへ論文は学術的志向性を強く示す。「イタリア・マルクス主義史入門」（N. 184），「イタリアのマルクス主義文献」（N. 185）の一連のイタリア社会主義論文，文献紹介がその具体的成果である。

後に，量的に倍増されて出版される，「イタリア・マルクス主義史入門」（1909）は，イタリア社会主義史研究と並んで，ミヘルスのこの分野での重要な業績である。ドイツやフランスと比較して，その独自性を的確に指摘している。

先ず，いうまでもないが，イタリア社会主義史でマルクスよりも先に登場すべきなのが，バクーニンである。ミヘルスは，イタリアのバクーニン派が決して反マルクスではなかったこと，むしろ，後のマルクス受容を容易にしたとし，「マルクス主義とバクーニン主義は二つの体系というよりも二つの方法と考えられていた」と評価している。両者を対立させたのは，エンゲルスである。バクーニンはイタリアでは，ロシアとは異なった戦術を取ったし，イタリア人の倫理観に基本的に同意してい

た。また，イタリア時代のバクーニンは，はっきりと史的唯物論に従っていた。後のイタリア・インターはバクーニン派に牛耳られたが，それは大胆な行動力（ガリバルディ的）の面で，個人的人間的な相性の面で，また，反権威主義，反中央集権主義，伝統的な個人主義と地域主義の面で，合致したからである。それに反してマルクスは，ロンドンに住む物書きでしかなかった。

1880年代に，イタリア経済学にもマルク主義が導入されたが，それは価値論というよりも「史的唯物論の理念」であり，イタリア経済より思想問題に注意が寄せられた。マルクス主義受容を容易にする土壌は，ルネッサンスで既にしつらえられたという。近代の社会思想の殆どが姿を現したからである。すべての近代的理念が16世紀に見られたことをミヘルスは指摘している。社会主義でも，ヴインツェンツォ・ルッソとカルロ・ピサカーネがあげられる。マルクス受容については，こういう歴史的条件に加えて，90年代以降のイタリア経済の近代資本主義への離陸も重要であろう。

マルクス研究は，1892年の社会党創設ジェノバ大会の後，議会主義とその反対派の分裂後に盛んになった，といわれる。

19世紀のイタリアでのマルクス主義研究で最良と評価されたコラヤンニの『社会主義』は，スペンサーとマルクスを本質的に異なるところ無しとして，ダーウィン主義の立場に立った研究であった。

本格的なイタリア・マルクス主義の夜明けは，クリショフとトゥラーティによる半月誌 “Il Critica Sociale”の発刊とともに始まった。

1900年後のイタリア・マルクス主義は，「初歩的なマルクス・ファナティズム」の時代から，批判的マルクス主義，マルクス批判の時代へと進んでいく。こうして本格的な「研究」が始まったのだが，同時にドイツでは，修正主義論争が始まった。ミヘルスによると，イタリアでは，「オーソドクス・マルクス主義」と批判的「修正主義」との対立のようなものは存在しなかった。トゥラーティとラブリオーラの対立も，ドイ

ツのように，「マルクス主義と修正主義の対立ではなく，改良主義的修正主義と革命的修正主義，左と右のマルクス修正主義が無媒介に対峙したに過ぎない。」ともかく，正統派的マルクス主義はイタリアには存在しなかった。しかし，マルクス主義は階級闘争と集産主義としておおくのインテリを引き付けた。アナーキストのみならず，共和主義者そしてブルジョア・ラディカルの一部もマルクス主義の根本思想を自らのものとしていった，という。

ミヘルスの道徳・倫理観は基本的にヘーゲル的である。歴史に内在する目的の存在を信じているように見える。いくつかの論考から，当時のミヘルスの考えを吟味しておこう。しかしながら，そこからは，新カント派的な科学的客観性の問題意識が浮上し始めていることが分かる。

「ストライキの正当性」（N. 201）では，ストライキを「権利」の次元で判定するブルジョア的，自由主義的な議論を否定する。というのも，「労働条件の独占的決定者」としての資本家と労働者の対立が中心にあるからである。労働力商品の売り手と買い手としての，契約上の権利対権利の対立で決着をつけるのは，マルクスのいう「暴力」，資本の権力である。

社会主義の世界観からは，「歴史的，道義的，よって社会経済的権利」が労働者の側にある。無階級社会（ストライキの原因である階級対立の廃絶）の建設には，労働者大衆の経済的道義的な成熟（つまり，連帯感と階級意識の覚醒）が必要だが，ストライキはその手段として最適だとミヘルスは主張する。

「よって，正当な，歴史的に必然的な目的の達成に不可欠の手段としてのストライキは……それ自体で正当である。」

ここで，ストライキはどんな「形式」でも，目的によって正当化しうるのかという問題が生ずる。ミヘルスは先ず，「よき目的」は，「非道義的手段を道義的手段に変えはしない」，と否定する。ところが，目的ではなく，「プロレタリアートの強いられた非人間的状況」こそ，正当化

を可能とする。というのも，そのような状況自体が，道義的手段を不可能とするから，と。結局，個々のストライキ行為での判断基準は階級廃絶という「理想的目標」を自覚しているか否かに存する，といえよう。

「神の見えざる手」の論理に似た論理を使って，ミヘルスは歴史的必然性への確信を吐露する。事業者が善人で，ならず者がストを煽り，そのせいで前者が破産の憂き目にあったとしても，何の支障があろうか，とミヘルスは断言する。ここにセンチメンタルになる理由は存在しない，と。

「善良なる神が，経済的必要にかられて，悪を擁護せざるを得ないとしたら，また逆に，悪を覆すために，無数の悪魔が同じ必要にかられて，悪に抗して群れを成して殺到するとしたら，その場合，善良なる神は敵となり，邪悪なる悪魔は道義の促進者となる。あらゆる人間的偶然性を超えて，目標への運動がそびえている。」

「贅沢」（N. 199）も，経済学的であると同時に，道義的批判を含意する概念である。ミヘルスは，それを「社会学的機能」の視点から考察しようとする。

トリノ大学では経済学関係の講義を担当することになっていたこととも関係しているが[(22)]，これはミヘルスの「経済学」関係の論文の最初のものであろう。

しかも，本格的に論ずるのではなく，「実験的に取り上げてみる余禄」として書いている。

先ず，いくつかの通説を批判することから始める。贅沢は原料を無駄使いし，貧困を生むという説は証明が難しいとする。（1916年に書かれた河上肇の「貧乏物語」はこれを証明しようとした。）金持ちの贅沢は他人の所得を増やすチャンスを生むとする逆の命題も可能だが，フェッリは，この弁明を，怠け者のヤクザの言い草に（「ワシのおかげで監獄吏，警察，弁護士などの仕事が成り立つ」）になぞらえて道徳的に批判した。しかし，ミヘルスは「この比較は面白いが，持ちこたえられない」

と主張している。

更に，モリス（生産の転轍機論），マックス・シッペル（「調整装置」論），そしてローザ・ルクセンブルク（「贅沢を生産する労働者自身はしばしば飢えている」）を批判的に取り上げ，最後に，典型的と思える見解，「道徳的に非難すべき消費は，最終結末では経済的に常に有害である」とする，ルイージ・コッサを正しくない，と断定する。

といって，ミヘルスが贅沢を擁護しているわけでは，勿論ない。「今日のかたちの贅沢は，社会道徳の基準の明白な侵犯である。」従って，贅沢は「今も多くの人々の静脈の中にたぎっている，反逆の倫理の影響を強くこうむるだろう。」といって，生活必需品に困る人が一人もいなくなるまで，誰も贅沢品の生産に携わってはならぬ，という倫理的要請は，経済学的には証明できない，と語っている。経済と道徳は別物であり，「倫理的に有害なもの」も経済的には有益でありうるからである。

確かに，今日の形の贅沢は全く不平等な分配の徴である。それは階級間対立と闘争を激化させる。「しかし，純経済学の分野に限っていうと，やはり，贅沢は社会的に有益だということは認めねばならない。従って，社会主義者が贅沢に対する道徳的な発奮のはけ口として，それを攻撃しても正しくはない。全くの混乱である。贅沢は経済的に有害と称することで，……道徳的な側面から攻撃しているだけである。道徳的にはあまりに明白な不正の要因なのだが，必須の要因である。」

ともかく，贅沢を道徳的にではなく，経済の分野で批判することは出来ない。

ここで，ミヘルスははっきり科学としての経済学の立場に立っていることを鮮明にした。経済学的にいえば，贅沢は不平等の結果であっても，原因ではない。

政治的には，「断念」，「幻滅」，絶望と特徴づけられる1907年のミヘルスだが，性道徳の問題については，相変わらずラディカルであった。「性倫理の改善のための雑誌」に書いた「女性の悲惨と人間の尊厳」は，

現代の婚姻形式は「人間の尊厳の感情」を廃れさせると断言し，「今の形式での婚姻という鎖を断ち切ることが最少限綱領」とし，「自由な人間として自立した女」であるために離婚を推奨する。Sibylle Aleramo の小説「女」の書評だが，作者の主張を肯定的に紹介している。男の「母性」崇拝は，女性を人間として理解できないことの徴だという。いわんや，母性にいつも，「犠牲的精神」を求めることは，「非人間的な考え」に他ならないと弾劾する。

ところで，イタリア社会主義の特徴として，当初，インテリが大量に参加したことは周知に属する。しかも，そのひとつの誘引として，ミヘルスは，「イタリアでは，他国ほどに，資本と結びついていないインテリが，大挙してプロレタリアートの旗――それは同時に，科学の旗でもあった――にもとに参集した」ことをあげる。[23] 耳目を引く「大量の転向」現象だった。しかし，大衆の，――とりわけ南部農業労働者――の伝統的意識はさほど変わらず，デモに際して，マルクスの像とならんで，国王の像や十字架が掲げられたという。

1892年に社会党が結成されたのだが，その元ブルジョア色に反発してミラノに純粋な「労働者党」が結成された。それは，「労働者の解放は労働者自身の仕事である」との，インターのモットーの「誤解」に基づいている，と指摘するが，今ではその真意ははっきりしている。

しかし，世紀の変わり目頃より，インテリと労働運動との関係も変わってきた。「イタリア・マルクス主義史」（イタリア語版，09年）の序文で，こう述懐している。マルクス主義は，「この間に流行おくれになったように見えるし，科学の分野ではむしろ，親資本主義の傾向が優勢である。即ち，労働運動一般，とりわけ社会主義系の労働運動に対しては非常に疑い深くなっている。[24]」

このインテリの社会主義離反の例として，ミヘルスはエイナウディを出していた。1907年末，ミヘルスも同じように，トリノで PSI と手を切る。[25]

1907年のミヘルスは社会主義批判から社会科学へと一歩踏み出した。さらには，SPD 批判は政党社会学へひきつがれ，（社会主義）政党の堕落の必然性の証明へ，そして社会主義と民主主義の不可能性の論証へと進むと想定することは，不可能ではない。

注

（１）　安世舟『ドイツ社会民主党史序説』，お茶の水書房，1990年，190頁。

（２）　ミヘルスの著作からの引用は，本文や注でことわらない限り，“Opere di Roberto Michels” in *Studi in Memoria di Roberto Michels.* Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76 にあるミヘルスの文献目録の番号で本文中に略記する。1907年分は本稿末尾に掲載してある。

（３）　1907年の２月，ミヘルスらはマールブルクで「社会主義，民族主義そして学生」というテーマで公開討論会を開催した。（ミヘルス（拙訳）「ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流」『神戸学院法学』第23号第４巻1993年，93-96頁）

（４）　R. Michels, *Le Syndicalisme et le Socialisme en Allemagne.* «Syndicalisme et Socialisme,» Bibliothtèque du Mouvement Socialiste, Avan-propos, par Hubert Lagardelle, Paris, 1908. この論文は注（２）の，リストには入っていない。さらに，自己のサンディカリスト時代の過去を誇張しながら書いた「底流」論文には，この会議と自分の報告について一切記述されていないのは，不思議なことである。

（５）　たとえば，代表的な社会主義思想史である Cole, G. D. H. *The History of Socialist Thought,* 1953-60. III, 1, p. 388. ここでの，コールのラガルデル評は有益である。

（６）　libera docenza は一般に「大学教官資格」と訳されている。非常勤講師に近い地位である。登録学生数と講義数に応じて政府が供与を支払う。当時，この資格が乱発され気味で，教育的にも問題となり，Credera 案で改革されようとしていた。ドイツと同じように，供与を学生から直接徴収する直接報酬制度へ変えようとするものであった。もっともドイツでは反対方向の改革が進められようとしていた，という。cf. R. Michels, *Sulla Libera Docenza in Italia ed in Germania. Note.* «La Riforma Sociale», anno XX, vol. XXIV, fasc. 6. Estratto, 7 p.（1913）

（７）　Pino Ferraris, *Saggi su Roberto Michels,* Pubblicazioni della Facolta di Giurisprudenza dell’ Università di Camerino, 1993. p. 147-149.

（６）　ibid.

（9） Cole, ibid.

（10） 「底流」論文でも，イタリア・サンディカリスト・フラクションの代表として参加したと，書いている。

（11） 安，198頁。

（12） Ferraris, p. 155.

（13） ibid.

（14） 安，198頁。

（15） *Le patriotisme des socialistes allemands et le congrès d'Essen.* «Le Mouvement Socialiste», Xe année, troisiéme série, t. II, p. 5-13.（1908）

（16） アイスナーについては，ミヘルスは後年一文を書いている，*Kurt Eisner.* «Archiv für Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung», Band XIV, Heft 3, S. 364-391, 1929.「底流」論文によると，当時から二人の思想的交流が始まった。98頁。

（17） *Michels-Antologia di scritti sociologici* a cura di Giordano Sivini, Introduzione, p. 24.

（18） 「底流」論文，98頁。

（19） 目次は以下の通り。

1） 国際的社会主義におけるドイツ社会主義者の指導的役割，

2） 国際的社会主義における SPD のヘゲモニーの動機，

3） SPD のヘゲモニーの不毛さ，

4） 国際的社会主義における SPD ヘゲモニーの頽廃，

5） 国際的社会主義への反動の causa causarum としての，祖国問題と戦争問題への SPD の姿勢，

6） 1907年 SPD 選挙敗北とインター，

結論：国際的社会主義における SPD ヘゲモニーの凋落。

（20） プロカッチ，豊下楢彦訳，『イタリア人民の歴史』II，未来社，1996，232頁。

（21） Ferraris, p. 160.

（22） 就任公開講義は，翌1908年12月1日になされ，1909年にアルヒーフに発表された。*Der Homo Oeconomicus und die Kooperation,* «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», Band XXIX, Heft I, S. 50-83.

（23） *Der italienische Sozialismus,* «Volksstimme», 1907.

（24） *Storia del marxismo in Italia,* 1910, introduzione, p, 14

（25） 「底流」論文，106頁。

ミヘルス文献目録（1907）

A. "Opere di Roberto Michels" in *Studi in Memoria di Roberto Michels,* Annali

della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R. Università degli Studi di Perugia. p. 39-76 より，1907年分。

184. *Historisch-kritische Einführung in die Geschichte des Marxismus in Italien.* «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik». Band. XXIV H. 1, S. 189-258.
185. *Die italienische Literatur über den Marxismus.* «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik». Bd. XXV, Heft 2, S. 525-572.
186. *Le socialisme allemande après Mannheim.* «Le Mouvement Socialiste», IIe série, IXe année, N. 182, p. 5-22.
187. *Over den tegenwordigen Toestand van het Socialisme in Duitscland.* «Ontwaking». Estratto, 16 p..
188. *Proletarischer Patriotismus.* «Arbeiter-Zeitung», 16 Jg., N. 77.
189. *Renaissance des Patriotismus.* «Das Magazin für Litteratur». 73 Jg., N. 5-6, S. 153-156.
190. *Kontrareplik* (risposta ad una replica del Diehl ad una recensione fatta da R. M. del suo volume su *Sozialismus und kommunismus*). «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», Bd. XXIV, H. 1, S. 464-476.
191. *Controverse socialiste.* «Le Mouvement Socialiste», IIe série, IVe année, N. 184, p. 278-288.
192. *Duitsche Toestanden.* «Ontwaking», Maandschrift, nieuwe Peeks, VIIe Jaargang, N. v, p. 195-199.
193. *Die deutschen Sozialdemokraten und der internationale Krieg.* «Morgen», N. 10, p. 299-304.
194. *Luigi Onette,ein Maler- Sozialist.* «Sozialistische Monatshefte», Bd. 2, H. 9, p. 767-770.
195. *La democrazia socialiste e l'aristocrazia democratica.* «Il Grido del Popolo», anno XVI, N. 57.
196. *Il Socialismo Tedesco e l'internazionale operaia.* «Il Grido del Popolo», anno XVI, N. 18.
197. *Demographisch-statistische Studien zur Entwicklungsgeschichte Italiens.* «Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im deutschen Reiche», Band XXXIII, 2, p. 95-126.
198. *La vittoria dei conservatori elezioni germaniche del 1907. Appunti storici e statistici.* «Riforma Sociale», seconda serie, vol. XVII, fasc. 2, Estratto, 21 p..
199. *Divagazioni economiche sulla funzione sociale del lusso.* «Riforma Sociale», seconda serie, vol. XVII, anno XIV, fasc. 2, Estratto, 21p..

200. *Die deutsche Sozialdemokratie im internationalen Verbande. Eine kritische Untersuchung.* «Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik», Bd. XXV, H. 1, S. 148-231.
201. *Über die Gerchtigkeit der Streiks.* «Polis», Sozialpsychologische Rundschau, 1907. Erstratto, 4 p..
202. *Le prochain congrès socialiste international.* «Le Mouvement Socialiste», 9e anée, IIIe série, N. 188, p. 37-46.
203. *Der erste internationale Kongress zur Bekämpfung der Arbeitslosigkeit.* «Die Neue Zeit», 25 Jg. Bd. I., N. 14 S. 473-478.
204. *I sindacati tedeschi e la lotta contro la disoccupazione.* «Il Divenire Sociale», anno III, N. 3, p. 35-39.

B, 上記Aに記載漏れの文献。

1. *Le Syndicalisme et le Socialisme en Allemagne.* «Syndicalisme et Socialisme,» Bibliothtèque du Mouvement Socialiste, *Avan-propos,* par Hubert Lagardelle, Paris, 1908.
2. *Der italienische Sozialismus.* Aus der Waffenkammer des Sozialismus-Eine Sammlung alter und neuer Propaganda=Schriften, herausgaben von der Volksstimme, Frankfurt a. M. 9. halbjahrs=Band（Juli bis Dezember 1907）.
3. *Wahlkompromisse in Italien.* N. 156, Volksstimme, Frankufurt a. M., 8. Juli 1907.
4. *Frauenelend und Menschenwürde.* Mutterschutz-Zeitschrift zur Reform der sexuellen Ethik. III. Jahrg., Heft 12.

C. 書評 La Riforma Sociale-Anno XIV, Vol. XVII.

Friedrich von der Leyen: *Die deutsche Universität und die deutsche Zukunft,* 1906.